

—2023 年度 卒業式より—

### 魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な出会いや経験で多くのことを学びました。そこには喜びや楽しさだけでなく、思い悩むことや苦しいこともありました。そんなときも家族や友人、先生方、多くの人に支えられ、今日という喜びの日を迎えることができました。

活水学院は今から 145 年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なる全ての者が、いつまでも渴くことのない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命を得るように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「天（あま）色」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲り致します。「白」のリボンには、「誠実で何事にも動じない人になってほしい」との願いを、「天色」のリボンには「天からの恵みを受け取り、どこまでも広がる可能性をつかむ人になってほしい」との願いを込め、お譲り致します。

在学生の皆様、どうかこの 2 本のリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、「新約聖書 フィリピの信徒への手紙 4 章 13 節の御言葉、「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」をお贈り致します。

最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう、心よりお祈り申し上げます。

佐々木 美優（国際文化学部 英語学科卒業生）

### 魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりました手桶をお譲り頂きました。今年は新たに「誠実に何事にも動じない人になってほしい」との願いを白色のリボンに、「天からの恵みを受け取り、どこまでも広がる可能性をつかむ人になって欲しい」との願いを「天（あま）色」のリボンに託し、結び加えて頂きました。

私たち在校生は、この 2 本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渴くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として歩んでまいりたいと思います。卒業生の皆様は、この学び舎で神様の限りない愛を受け、先生方や家族に支えられながら、友人と共に様々な体験や学びを通して成長し、そして今日、晴れの日を迎えられました。これからはそれぞれの道を歩いていかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、忍耐を試される時や困難を感じる時もあるかもしれません。しかし、どのような時にも、いつも神様は共にいて先輩方の行く手を照らし、導いてくださいます。これからも愛と希望をもって、道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心からお祈り申し上げます。

今田 涼加（音楽学部 音楽学科 3 年）

—朝の礼拝から 1—

*Seeing the Light in the King James Bible*

Genesis 11 : 6

Studying English may be a **stumbling block** in your life: something that causes you problems or difficulties. Perhaps you have **fallen flat on your face** when you tried to use English and made a fool of yourself. Studying a language is a **two-edged sword**, it takes a lot of work to master, and you must to **go the extra mile** if you want to be good, **rise and shine** every day to work, but it may bring you to your **wit's end** with the time it will take. It is a **sign of the times** that many jobs require knowledge of English and the **writing's on the wall** if you have not studied. It leaves people with **broken hearts** and their **worlds are turned upside down** when the **powers that be** deny them a job because they do not know English. **Set your house in order**, do not look for **scapegoats** and think “**woe is me**” when a job is out of reach. Never **give up the ghost** and study English every day!

Today's message illustrates how the Bible influences our lives in how we speak and write. The **bold type** phrases are used in everyday English and come from the King James Bible which was commissioned in 1604 by King James I of England. This Bible was concerned not only with what was written but also how it sounded. It took six years to complete the translation by scholars from Westminster, Oxford and Cambridge, and it is still loved by many because of the poetic and beautifully written language.

There are many more everyday phrases we take from the Bible that you may already know. The ones here are just a **drop in the bucket**, so studying the Bible can also help your English move from **strength to strength**.

Richard Bent (英語学科)

—朝の礼拝から 2—

## 倒れて立ち上がる強さを

詩編 145 編 14 節

「倒れない強さと倒れて立ち上がる強さ、どちらが大事だろう？」以前、チャペルアワーでこのことについて考える機会をいただきました。倒れるとは、挫折や失敗で傷つき深い悲しみを背負うことですから、「倒れない強さ」を手に入れば傷つくことのない人生を歩けるのでは、と思う部分はあります。でも「倒れてはいけないのだ」というプレッシャーの中で必死にとどまろうとすると、心も身体もへとへとになってしなやかさがすり減ってしまいそうです。結果、生き生きとした自分を発揮することや自由なチャレンジにブレーキがかかってしまいかもかもしれません。

一方で、聖書の言葉「主は倒れようとする人をひとりひとり支えうずくまっている人を起こしてください」を心に刻んで生きるなら、たとえ倒れたとしても神様が導いてくださるのだという希望を与えられ、柔軟な心と身体を保つことができると思います。

若かった頃、失敗してうずくまり「どうして？」と自問を繰り返して過ごした日もあります。その時には経験したくない苦しいだけの出来事でしたが、実はその後の私を助けてくれる学びであったのだと、成長へのターニングポイントであったのだと実感することがあり、感謝の思いに包まれますのでなんとも不思議です。倒れたからといってそこは終点ではなく、次へ進むために準備された始発点なのですね。

弱い私たちのことをいつどのような時でも神様が支えてくださっていることを覚えて、倒れることを恐れず進みましょう。倒れて立ち上がる力を信じましょう。

橋本 祐子 (就職課)

## 一朝の礼拝から 1—

## キリシタン大名のそれぞれ

ヨハネによる福音書 13章 36～38節

キリスト教が伝わった 16 世紀、入信した日本人には戦国大名もいましたが、キリシタン大名はさまざまでした。第 1 号の大村純忠<sup>おおむらすみただ</sup>は島原の有力大名有馬氏の子で、その援助をあてに迎えられた、いわば取引銀行からの出向役員のような立場でした。まわりには有馬氏以外にも有力大名がいるので、「純忠なんか追い出せ」という家臣が現れます。困った彼は、教会からの支援をあてに入信し長崎を教会に寄進しました。その子の喜前<sup>よしあき</sup>は、江戸幕府との間の領地争いで教会が幕府有利な仲介をしたことに怒り、キリシタンをやめて逆に弾圧を始めました。とあるキリシタン史の研究者によれば、キリシタン大名で真面目に信仰していたのは高山右近<sup>たかやまうこん</sup>だけ。他には黒田如水<sup>くろだじよすい</sup>が、まあ真面目な方だったそうです。福岡藩黒田氏の藩祖です。

右近は大阪 高槻の大名で、勇猛果敢、城造りもうまく他の大名に尊敬され、彼が熱心に勧めるので入信した者もいました。豊臣秀吉がキリシタン弾圧を始めて彼に棄教を命じると、断って大名の地位を捨て、後にマニラに追放されて亡くなります。もっとも当時の日本の仏教は複数の宗派に属するのが当たり前で、キリスト教も仏教の一派と思われていました。「キリシタン宗にも入ってみるか」と入信して、禁教令が出たらさっさとやめる大名がいたのも当然です。如水は秀吉の側近でしたが、キリシタンを弁護するのでその怒りを買ったとされます。彼が亡くなると仏式に先立ち教会による葬儀が行われました。彼は自分の信仰と黒田家の信仰を分けていたようで、福岡藩はキリシタンをやめ幕末まで続きます。小西行長は堺の商人出身で、同じく秀吉の側近として活躍しました。関ヶ原の戦いに敗れ処刑される時、キリシタンとして死んでいます。こうしたキリシタン大名の誰に共感するかを考えてみるのも、自分の信仰をふり返るきっかけになるかもしれませんね。

細井 浩志 (国際文化学科)

## 一朝の礼拝から 2—

## 与えられた出会いを通して

フィリピの信徒への手紙 1 章 9～11 節

わたしは 20 年近く前にこの活水女子大学を卒業しました。今回は中学 3 年生の長崎での研修旅行のために参りました。わたしたち、清和学園の中学生、高校生の研修旅行の目的は、建学の精神である「平和を創り出す」者となるための学びです。思い出作りではなく、平和を創るために考える人になるために行われます。

今日、外海地区を見学させていただくにあたり、連絡を取ったのが、私が大学 3 年生の時に入学してきた 2 つ下の後輩でした。出会いは、宝です。大学時代に彼女と一緒に過ごした期間は 2 年間でしたが、卒業して 20 年近く経つ今、中学生のみなさんと一緒に長崎を訪ねる時の大きな力となりました。

わたしたちは、本当にたくさんの人に出会い、人生を歩んでいきます。その時に、いいな、と思った出会いもあれば、これはちょっと…という出会いがあるかもしれません。でも、どの出会いが、いつの日の自分を支える材料になるか、わたしたちにはわかりません。しかし、その 1 つ 1 つがわたしたちの中で大切な出会いとなるのです。

わたしたちは日々学ぶことを求められています。それは、わたしたちの愛がますます豊かになるためです。そして、そのことが、わたしたち一人ひとりをありのままに受けとめ、生かしてくださっている神さまを、わたしたちの周りの人たちに知らせるものになるといいます。多くの出会いと学びを得るために、わたしたちは高知から長崎の地に来ました。それは、大学で日々過ごしている学生のみなさんや先生方も同じことでしょう。今日という 1 日が与えられていることに感謝するとともに、今日の 1 日も、たくさん、心と体を動かして、しっかり学ぶ 1 日としましょう。

三浦 真菜 (清和女子中学高等学校教頭 2004 年度本学音楽学部卒業生)

## 一朝の礼拝から 1—

## 生きる意味

マタイによる福音書 6 章 34 節

日頃から、自分はなんのために生きているんだろうと考え続けています。この所、考えていることは、人は何かをするためとか、何かを話すために生きているのではなく、ただそこに在るために生きているだけで十分ではないかと考えるようになりました。例えば、猫たち。彼らは他の猫に気に入られようとしたり、出世したり、より多くのものを所有したいなど考えません。日々、食べては寝ての繰り返しです(時々会議はしているようですが・・・)。しかし、我々は彼らの存在によって癒やされているのは事実ではないでしょうか。もちろん、猫たちは人を癒そうと生きているわけではありません。受け取る側の受け取り方だと思います。キリストも何をしたか、何を行ったかより、存在することによって多くの人が癒やされた(今も)のではないかと考えます。

また、能動と受動について考えてみた時に、極論になるかもしれませんが、何かを人に与えることはできない、ただ受け取ることはできるのではないかと。つまり、教師は学生に教えることはできないけれど、学生は教師から学ぶことはできる。さらに言えば、われわれは神を愛することとはできないけれど、神から愛されることはできる。神が用意してくださった多くの恵みを受け取れるように、自分が変わり続けていくことが大切なのではないかと思います。

最後に、昨日私が作曲した曲を聴いていただいて締めくくりとしたいと思います。音楽もまた、作曲者が何を表現したいかではなく、聴いた人がどう感じるか、どう受け止めるのかが、最も重要なことかもしれません。



安川徹作曲「旋律第 217 番」変ニ長調(QR-Code から視聴できます)

安川 徹 (音楽学科)

## 一朝の礼拝から 2—

## 活ける水 — 神の愛 — が夢の花を咲かせる

ヨハネの手紙 4 章 10 節

ある人が「私は神がいると思ったことはありません。神がいるなら世界で起こっている戦争や犯罪は起こらないと思うからです。この疑問から、礼拝出席を苦痛に感じることもあります。本当に神などいるのでしょうか」ということを言っているのが聞こえてきました。

この問いの答えは何でしょうか。誰も神をその目でみたことはありませんが、神を信じるとは見たことがある、見えるから信じるという意味ではないと思います。よく神の領域という言葉が聞かれます。医療が発達した現代でも、重病人が回復するかは神の領域である等言われることがあります。人は感覚や人知を超えたものに出会ったとき、それを神と認識するのでしょうか。

キリスト教は愛の宗教と言われます。ヨハネの手紙 4 章 12 節では、「わたしたちが互いに愛し合うならば(中略)神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。」とされています。神は私たち人間を、愛をもって創造されたことは、この言葉からも明らかです。

この人に一つだけ言えることがあります。見えないから信じないということではなく、神を信じることはその存在を信じるというよりも、神の愛を信頼することです。私たちは生きていく途中で何かの間違いを犯します。その結果大きなことが起こることもあります。それでも、私たちが神の愛を信じ、受け取った愛を周りの人にも与えることができれば、世界は良い方向に向かうと思います。

学院の校章を思い浮かべてみると、神から与えられた水を他の人にも与えるということを形にしています。校章のように神から与えられた活ける水が、学生生徒の夢の花を咲かせることができればいいと思います。神を信じるか信じないかは、自分次第なのかもしれませんが、神の愛が与えられていることに気づき、周りにもその愛を授けることができるよう生きていくことは、素敵なことではないでしょうか。

中野 忠彦 (教務課)

一朝の礼拝から 1—

## イエスはロバに乗ってやってきた

ヨハネによる福音書 12 章 12-19 節

早いもので、2025 年となりました。新年を迎えるにあたり、皆様はどのようなことを祈られるでしょうか。「就職が決まりますように」「いい人との出会いがありますように」など、状況や立場によって祈る内容は様々ですが、自分の人生をより豊かで充実したものになりたいという願いは、誰しも共通して持っているのではないのでしょうか。

本日読んだ聖書の箇所には、イエスをイスラエルの新しい王として歓迎する群衆の姿が描かれています。当時のイスラエルはローマ帝国の抑圧下にあり、群衆の中には政治的な解放を願う人々が多くいました。彼らはイエスこそ、そのような救いを実現してくれると信じていたのです。しかし、イエスの思いは群衆の期待とは異なっていました。確かにイエスは救い主でしたが、その救いは政治的な抑圧からの解放ではなく、罪と死の支配から人々を救うためのものでした。イエスはエルサレム入城の際にロバに乗ることで、そのことを象徴的に示しました。通常、王や将軍は馬に乗って権威を示すものです。馬は戦いの象徴であり、力と威厳を示す乗り物でした。しかしイエスはロバに乗りました。ロバは平和の象徴であり、謙遜と柔和を表しています。イエスはロバに乗ることで、自分が「平和の君」であることを示そうとしたのです。

神様には神様の計画があり、それは私たちの理解をはるかに超えるものです。時には、私たちが求めるものと神様の与えるものが異なることもあります。しかし、最終的には、神様が独り子を犠牲にするほどに私たちを愛しておられることを信じ、そのご計画に身を委ねるしかありません。

新年を迎え、私たちは様々なことを祈ります。しかし、最も大切なのは、神様の愛とご計画を信じることではないでしょうか。神様は、私たちが求めるもの以上のものを与えてくださいます。この新年が、皆様にとって神様の祝福に満たされる一年となりますようお祈りします。

狩野 暁洋 (英語学科)

一朝の礼拝から 2—

## A Barren Tree

コロサイの信徒への手紙 3 章 23 節

It all started with a barren tree. This morning, I want to reflect on the inspirational life of Brother Lawrence (1611-1691), a lay brother of the Parisian Carmelite Order. A few hundred years ago, during another cold winter morning, on a battlefield, Brother Lawrence noticed a barren tree. As Brother Lawrence looked at the tree, he had a revelation. He realized the tree was not going to remain so. In time, the tree's leaves would return, and it would blossom again. God spoke powerfully to Brother Lawrence through a simple tree that day. To the extent that it led to his conversion and lifelong commitment as a monk. It reminds me of the encounter Job had in *Job 14:7* "For there is hope for the tree, if it be cut down, that it will sprout again, and that its shoots will not cease." The life of Brother Lawrence testifies of two things: First, a living encounter with God is life-altering. 2 Corinthians 5:17 speaks so clearly of this: "Anyone who is joined to Christ is a new being; the old is gone, the new has come". Second, constant, uninterrupted communion with God is possible. As a kitchen assistant and a shoe-repairman, Brother Lawrence experienced this firsthand where he deliberately chose to use his menial jobs to glorify God. His way of life became such an inspiration that people from all backgrounds would visit him to discuss his views on faith.

From there, his insights were published in a book in 1692, *The Practice of the Presence of God* that has never since gone out of print. Many described Brother Lawrence as someone who possessed an overwhelming sense of inner peace. Moreover, his legacy testified that all work carries great purpose. Isn't it striking that God chooses to reveal himself so strongly to the meek?

In these cold winter days, we tend to notice the barren trees. However, underneath the surface, these trees are deeply rooted and well-nourished. In due season, these trees will show signs of life again. A life hidden in Jesus Christ never dies. May we, like Brother Lawrence, be so captivated by the love of God, that we seek His constant presence in all our ways.

Postlude: All scripture passages: Good News Bible

Brother Lawrence (1692) *The Practice of the Presence of God*. Amazon

カレン・ストライドム (国際文化学科)